

今回は、子どもへの「言葉掛け」について紹介します。みなさんは、いつもどのような言葉を使っていますか？

★ できれば避けたい言葉 ★

川上康則（東京都立矢口特別支援学校）著「人的環境のユニバーサルデザイン」（2019）では、子どもの心に傷を残す「毒語」として、次のような言葉が紹介してあります。子どものためと日常的に使っている言葉が、子どもを傷つけていることがあります。

▲質問形式の問い詰め

「何回言われたら分かるの？」「どうしてそういうことするの？」「ねえ、何やってるの？」

「誰に向かってそんな口のきき方するんだ？」

▲裏を読ませる言い方

「やる気がないんだったら、もうやらなくていいから」→本当は「やりなさい」

「勝手にすれば」→本当は「勝手なことは許さない」

「あなたの好きにすれば」→本当は「言うことを聞きなさい」



▲脅して動かそうとする

「早くしないと、〇〇できないよ」「じゃ、〇〇できなくなるけどいいね」

▲虎の威を借る言い方

「お母さんに言おうか」「お父さん呼ぶよ」「校長先生に叱ってもらおうから」

▲下学年の子と比較する

「そんなこと1年生でもやりません」「そんな子は1年生からやり直してください」

▲見捨てる

「じゃあ、もういいです」「さよなら。バイバーイ」

★ 積極的に使いたい3つのコミュニケーション ★

友田明美（福井大学）著「子ども脳を傷つける親たち」（2017）では、大人が子どもに対して「積極的に使いたい3つのコミュニケーション」を紹介してあります。

① 繰り返す

「真っ赤なリンゴを描いたよ」→「ほんとだ、真っ赤なリンゴを描いたんだね」など、子どもの適切なセリフを繰り返すことです。話を理解していることが子どもに伝わります。

② 行動を言葉にする

子どもが自分で片づけをするなど、適切な当たり前の行動に対して、「あら、お片付けしてるんだね！」など、実況中継のように言葉にします。このように言語化することで、大人が子どもに興味・関心を示していることが伝わり、子どもにはよい行動だと学習する機会にもなります。

③ 具体的にほめる

「えらい！」「じょうず！」と大まかにほめるより、「友達におもちゃを貸してあげられたんだ！えらいね！」「（描いた絵を見て）お日さまが赤できれいにぬれてるね！」など、具体的にほめることは、子どもに伝わりやすく、よい行動を増やす効果があります。